

# 中国人のアメリカンドリーム

——『高等教育クロニクル』の記事より——

宮 田 実 (訳)

## The Chinese Mother's American Dream

—— An Article from *The Chronicle of Higher Education* ——

Translated by MIYATA Minoru

### 増え続ける中国人留学生

2014年12月、夜明け前の寒い朝、アビー・ウーはパジャマ姿で両親と共にリビングルームのソファに座っていた。この時アビーは人生で最も重要な瞬間を迎えようとしていた。遠く離れたアメリカ合衆国マサチューセッツ州にあるウェルズリー大学の合否結果の発表を待っていたのである。この日のためにアビーは膨大な時間をSAT(大学進学共通テスト)のための勉強に充て、エッセイを何度も書き直した。期待と不安の気持ちでウェルズリー大学のウェブサイトログインした。

このような光景は中国全土で見られ、その数は増え続けている。今年(2015年)の秋27万5千人を超える中国人学生がアメリカの大学で新学期を迎える。この数字はアメリカへの全留学生の約3分の1を占める。アメリカの大学は中国人留学生の学費収入にこれまで以上に依存しているが、合否発表を待つ彼らの気持ちをあまり知らないかもしれない。中国では約50万人の親がかたずをのんで子供の合否結果を待っているのである。

より良い教育、より良い人生を求めて子供を地球の反対側へ送るという決断には期待と不安が入り混じっている。それはアメリカに対するあこがれや中国に対する不満であり、子供の将来の夢の実現のためでもある。子供の大学選びや専攻分野の決定については北京

や上海の親たちもミネアポリスやダラスの親たちと同じように思い悩むものである。しかし、中国の親にとって一人っ子である子供をアメリカに留学させるということは単に財政上の投資というだけでなく、政治的な策略でもあり、犠牲的行為でもあり、外国での成功のための賭けでもある。言い換えれば、中国の親にとってのアメリカンドリームなのである。

### アビーとウェルズリー大学

アン・リウは自分の娘をアビーと名付けた。その理由は、Aで始まるので英語の名簿の初めに来るからである。ちなみにアビーの中国名はユーハンである。アンはアビーのためにできるだけのことをしてきた。デロイト会計事務所に勤めるアンは上司から「君は娘をプリンセスのように育てているね」と言われた。まさにその通りでアビーはバレエ、ピアノ、スケート等々さまざまな習い事を経験した。アビーの家庭ではそれが財政的に可能だったのである。過去数十年にわたって中国の経済は年10%近くの成長を続けてきた。アンが1992年に大学を卒業した頃、彼女の月給は106元(20ドル)しかなかった。しかし、その後彼女は多国籍企業に就職し、今では北京の中心部にある中国企業の重役である。アンの夫は衛星通信会社に勤めている。二人の収入の3分の1をアビーの教育に費やしてもまだ余裕がある。

1989年に北京で起きた天安門事件の後、中国の経済成長が始まった。その年の春、アンは大学の1年生だった。西安にある彼女の大学でもデモが起こった。やがて、アンは国家の安定がとても重要だと信じるようになった。彼女は「みんながミドルクラスになればと思います」と言う。中国の経済成長はここ数年陰りが見え始めており、就職戦線も厳しくなってきた。大学卒業生の未就率は20%に上る。即ち、100万人以上が就職できない状況である。こうした高学歴で仕事の無い若者たちが政府に不満を持ち、ひいては社会不安を再燃させるのではないかと心配する人もいる。アンは夫と共に恵まれた仕事に就いているが、自分たちは「普通の家族」だと言う。なぜなら彼らには生活を保証してくれる、政府や国営企業とのコネがないからだと言う。アンは「中国では成功のチャンスは普通の家族には縁のないものなんです」と言う。

それゆえ、アビーが中学生の時、アン夫妻は娘に安定した未来を保証してくれる外国留学という選択肢について考え始めた。このような考えは中国ではごく一般的なものである。最近の世論調査によると、優秀な中国人学生のうち75%は将来のキャリアで成功するためには外国の大学の学位が必要だと思っている。アンは職場でのアメリカ人の知り合いを通してアメリカの大学教育の卓越性を感じるようになった。アンはもしアビーがアメリカ

の大学を卒業すれば中国での就職に有利になるだろうと考える。さらに言えば、明るい未来と豊かな生活が予測できる外国での生活の第一歩になるかもしれないとも考える。

しかし、中国の親にとってアメリカの大学の合否判定のプロセスは良く理解できない。例えば、志願者が書いたエッセイ、教師の推薦書、課外活動など志願者の全体を審査するというやり方は、筆記試験の得点のみで合否判定する中国の国立大学の入学試験とは全く異なる。アメリカの大学入試はなじみのない料理がたくさん並ぶビュッフェのようである。質を求めてフィレステーキに出会えるかもしれないし、好みに合わない料理を選んでしまうかもしれない。中国ではアメリカの大学入学に関する適切なアドバイスを求めるのは難しい。専門のカウンセラーがいる高校は極めて少ないので専門の業者に依頼することが多いが、中にはわずかなサービスに対して法外な料金を請求する業者もある。

アンの場合、ワシントン D.C. の大学医学部で研究員をしている彼女の姉に相談したところジョーンズホプキンス大学を薦めてくれた。しかし、その大学は、フランス語を学びディケンズを好んで読み、将来は公衆衛生の分野で働きたいアビーには魅力的ではなかった。また、彼女は中国人が多く集まる大規模な州立大学には行きたくなかった。中国では、中国語を勉強したければ4年間ミシガン大学かイリノイ大学へ行けばいいというジョークがよく聞かれる。アビーはアメリカ人と交流するためにアメリカに行きたいのである。

中国ではアメリカのリベラルアーツ大学はあまり注目されていない。ほとんどの親は大学のランキングや経営学や工学といった職業に直結する分野の学位を高く評価する。しかし、これまでの3回のアメリカ訪問でいくつもの大学を見学したアビーにとってはウェルズリー大学が第1志望であった。アビーはその女子大学の牧歌的なキャンパス、少人数クラスが気に入った。また、中国ではあり得ないことだが、専攻を決めるまでにあらゆるコースを見学することも気に入った。とりわけ気に入ったのは、自信に満ちた女子学生たちの姿であった。それはアビーの理想とする姿であった。アビーはこの大学に行こうと決めた。

合否の発表の日が近づくにつれて心配になってきた。英語で書いたエッセイは説得力があるだろうか？ SAT を4回も受けてスコアを2,210点までに押し上げたが、ウェルズリー大学の学生になるのに十分な点数だろうか？ ウェルズリー大学の1回目の合格者発表の前夜、アビーは滑り止めのいくつかの大学の願書を作成しようとしたが、それには集中できなかった。ウェルズリー大学は1回目の合格発表をアメリカ東部時間午後5時（北京時間午前6時）に予定していた。アビーはその1時間前に目が覚めていた。そして両親と共にリビングルームのソファに座っていた。両親はアビーを落ち着かせようとしていたが、アビーは両親がアビーと同じぐらい緊張していることを知っていた。

ついにノートパソコンの時計が6時を告げた。アビーがログインすると「おめでとうございます」というページが現れた。アビーは興奮しすぎてそれ以上読めないで両親と抱き合った。アンは「17年間娘のためにやって来たことが報われたような気持ちです」と言った。合格発表から数か月後、アビーはウェルズリー大学にいる自分を想像していた。彼女は大学では政治学を学び、社交ダンスクラブに入り、アメリカ人のルームメイトと仲良くしたいと思っている。また、4年後、6年後、8年後のことも考えている。学部を卒業後、大学院に進学し、どんな職業に就くかも考えている。

アビーはいつも、将来外国に行ってもその後も中国以外のどこかの国に住んでいる自分を想像していた。アビーの叔母を含めて一世代前の中国人が中国を出て、戻ってこなかったように自分もそうなるのではないかと思っている。そんな先のことはわからないけれど。

最近、アビーは「中国人のアメリカンライフ」というラジオ番組を聴いた。レポーターは次のように語っていた。「中国人は自分の国についてあまり良いイメージを持っていません。彼らは中国がさまざまな問題を抱えた弱い国だと思っています。」アビーはそのレポーターのコメントについて考えていた。彼女は次のように言った。「私たちの世代の若者は中国は本当に偉大な国だと感じ始めています。私たちは、西洋は偉大だと言うだけでなく、我が国のために何かをしなければならないのです。中国は最近目覚ましい発展をとげています。この国は私たちのように西洋諸国で学び、帰国し、国のために貢献する人々を数多く必要とするでしょう。中国は私を必要とするかもしれません。」

## ベイニとマギル大学

アメリカに大挙留学している中国人学生のことをアメリカ人は「彼らはいい車に乗っているし、みんなお金持ちだよ」と言う。このコメントはある程度真実だと言えよう。アメリカの大学は学部の留学生に対してほとんど財政支援をしない。留学生募集は大学の財政上重要なものになっている。中国人学生が支払う授業料は大学の重要な収入源である。初期の中国人留学生の多くは中国経済界や政界の指導者の子供たちだった。習近平国家主席の娘は最近ハーバード大学を卒業した。現在中国からアメリカへ留学する学生たちは経済成長で急激に増加している中産階級の人々である。これらの学生の出身地は主に豊かな国際都市であるが、最近増えているのは地方都市の出身者である。例えば、西洋人にはあまりなじみのない蘭州市、長春市、青島市などである。

このような地方都市の一つに浙江省の寧波市がある。ここはシカゴと同じぐらいの大きさの港湾都市であり、経済の中核都市でもある。海と山に囲まれており、高速鉄道に乗れば2時間で上海に行ける。4年前、公立の寧波外国語高校が大学科目事前単位認定制度を

持つ国際部を設置した。このような西洋式のカリキュラムを提供する国際部は中国全土で注目されており、外国の大学への留学を考えている高校生のニーズに答えている。

ワン・ベイニは寧波外国語高校国際部の3年生である。彼女は中学生の時、エール大学の入学案内ビデオを見て外国留学を考えるようになった。ベイニはそのビデオを気に入り放課後、何度もそのビデオを見た。彼女は「中国の大学のビデオは形式ばっていてつまらないけれどこのビデオは全く違っていたんです。私はこのビデオに感動し外国での生活は素晴らしいと思わせてくれたのです」と言う。ベイニと両親が外国留学を真剣に考えた理由がもう一つあった。それは、中国の教育では高考と呼ばれる大学入学試験が極めて重要だということである。この試験の結果によってどの大学に入学できるかだけでなく大学で何を学ぶか、またそもそも大学に進学できるかどうかが決まるのである。しかし、高考の前に中考と呼ばれる高校入学試験がある。この試験の結果によってどの高校に行けるかが決まる。ベイニは数学が苦手である。彼女は自分の中考の数学の点数ではレベルの高い高校、ひいてはエリート大学には行けないことを知っていた。寧波外国語高校国際部への入学には中考の得点は足りない。また、国際部の学生は外国留学するので高考を受験する必要はない。即ち、国際部に入学するということは中国の大学には進学できないということである。しかし、それは同時に中国のストレスの多い入学試験制度から逃避できるということでもある。

ベイニは18才だが、見た目はもっと幼く見える。彼女は物静かで教室ではあまり喋らない。しかし、彼女は中国有数のディベーターであり、いったん話し始めると一語一語力のこもったものになる。彼女はかつてディベートで「外国留学は役に立つ」という命題について賛成論を述べたことがある。

ベイニの両親は新しい試みを受け入れることのできる人たちである。母親のウー・リインと父親のワン・フンエンは地元の大学で講師をしているが、二人とも中国の試験中心の教育システムには疑問を抱いている。フンエンは「心身を疲れさせるだけでもううんざりです」と言い、リインは「機械的なトレーニングみたいで大嫌いです。娘には何かを学んでほしいのです」と言う。二人は元々、ベイニを外国の大学院に行かせようと思っていた。二人の年収の合計は20万元(3万2千ドル)であり、この収入で娘をアメリカの大学の学部留学させるのは難しい。寧波外国語高校国際部の学費だけでも1,600ドルかかる。それでも彼らは何とかして娘を外国に留学させようと思ったのである。リインは副業で高校生にSATや英語を教えたことがある。また、彼らは寧波市中心部の家を売り、郊外の狭くて安い家を買った。中国の大都市の住宅価格はこの十年間で高騰し、8倍の価格になったところもある。そして、中国では不動産を売って得たお金を子供の外国留学のために使



うことは決して珍しいことではない。

フンエンとリインは我が子のためにはどんな犠牲も払ってもいいと思っている。リインは「これは娘への投資ではなく、娘の良き人生のためなのです」と言う。最近、リインはベイニが中国以外の国で暮らすほうがいいと考えるようになった。石炭を使用する工場からの煙や道路にあふれる自動車の排気ガスによる大気汚染はひどく、汚染状況が深刻な時は子供たちは外で遊ぶことを禁じられる。中国疾病予防センターの予測によれば、北京に住む18歳の人は今後の人生の40%を不健康な状態で過ごすことになる。寧波は北京ほどひどくはないが、リインは娘が空気のきれいなところで住んでほしいと願っている。ベイニは両親が自分のために一生懸命働いてくれているのを見てきたので罪悪感を感じている。彼女は「両親は私の夢を励みに苦勞してくれているのです。だからチャンス逃してはいけません」と言う。

合否通知の手紙が届き始めた。第一志望のイェール大学からは不合格の知らせが届いた。環境教育に力を入れているバーモント州のスターリング大学からの合格通知には年間2万ドルの給付奨学金が含まれていた。しかし、ベイニはエコロジーや農業に興味があったが、辞退した。なぜならスターリング大学には中国人学生がほとんどいなくアメリカ人ばかりの環境でうまくやっていく自信がなかったから。次に、ウィリアム&メアリー大学からは合格の通知が届いた。しかし、年間の学費が5万6千ドルという高額だった。財政支援もなくあきらめざるを得なかった。リインの強い勧めもあってベイニは滑り止めとしてカナダの大学に願書を提出していた。今年の春、アメリカの大学の合否発表の数週間後、ベイニはモンリオールにあるマギル大学から合格通知を受け取った。学費はウィリアム&メアリー大学の半分だった。彼女は今年の秋にマギル大学での生活をスタートさせる。

## 50万人の夢

ドゥ・ムルの一日のスケジュールは次のような感じである。学校、宿題、SATの勉強、宿題、3匹の猫との遊び、SATの勉強、睡眠。これが毎日続く。6月に彼女は初めてのSAT受験のために香港へ行く予定である。この試験は中国本土ではいくつかのインターナショナルスクール以外では受験できないのである。受験のストレスは相当なものである。彼女は「絶対失敗は許されません」と言う。高校1年生で16才のムルが受けるプレッシャーはまだ始まったばかりである。おそらく彼女はスコアをもっと上げるためにあと数回SATを受けることになるだろう。その後、更に大学が指定する科目を選択して受験するSAT IIと英語の試験もいずれ受けることになる。今後2年間このような勉強スケジュールが続くのである。

中国の多くの親たちは子供に外国留学をさせたいと思っている。なぜなら、批判的な考え方や幅広い教養を身につけてほしいからである。しかし、皮肉なことに、アメリカの大学に入学するためにはSATの勉強が欠かせない。

中国ではムルよりもっと早い段階で外国留学の準備をする人たちがいる。特に、子供をアイビーリーグ等のエリート私立大学へ行かせようとしている家庭である。中国からのエリート私立大学への志願者は急激に増えているが、入学を許可される中国人学生の数はあまり増えていない。現在約2万5千人の中国人がアメリカの高校に在籍しており、その数は増え続けている。北京ではプリンストン大学の卒業生の女性が、アメリカの名門ボーディングスクールを目指す9才から15才の生徒に英語を指導するプログラムを始めた。彼女は3才の子供を持つ親から相談されたこともある。その親は抜きんでたモンスターペアレントである。

ムルにとって気がかりなことがある。外国留学を目指す一般的な学生と違って、彼女は厳格な中国の高校に在籍している。即ち、高考が最終目標となる。1つではなく2つの運命を左右する試験の準備をしているのである。このやり方を強く勧めたのはムルの母親のチン・ジャンリーである。彼女は、北京で最も優秀な高校のクラスで3番の成績のムルなら両方できると信じている。外国留学を目指す高校生のための国際部は一般の中国の高校ほど学習面で厳しくないと思っている人が多い。ジャンリーはムルがSATのための学習だけでなく、学校での学習もしっかりしてほしいと思っている。

ムルが中学生の頃初めて外国留学したいと言った時、ジャンリーは本気だと思わなかった。この頃ムルは自動車や飛行機が闘うロボットに変身するSF映画『トランスフォーマー』をよく観ていた。しかし、それがきっかけでムルはエイリアンや他の惑星の生物に興味を持つようになり、その後、天体物理学に惹かれるようになった。そこで天体物理学を学べる一流の大学を探していると、それが外国にあることがわかった。今では彼女は獣医学を学びたいと思っているが、どちらにしても外国留学をしたいと考えている。

ジャンリーは外国留学はコストが高いと思っている。また、ムルは成績がいいので中国のハーバードやイエールと言われる北京大学や清華大学に入学できると思っている。これまで外国留学はランクの低い中国の大学へ行くよりは良い選択肢だと考えられてきた。しかし、その考えは変わりつつある。ムルの場合、中国でトップの大学に行けるのになぜハーバードやイエールなのか？ムルの決意を知ってジャンリーは考えが変わった。彼女は「中国では親は子供のためにできることは何でもしてあげようと思うのです」と言う。実際ジャンリーはムルのためにできるだけのことをしてきた。ムルは幼い時、夜眠る前にジャンリーに本読みをせがんだ。話に夢中になると夜遅くまで何度も繰り返し読むことをせがんだ。

時にはジャンリーは目を閉じたまま暗唱したストーリーを読むこともあった。そんな時ムルは母親の目を開けようとして「ママ、寝ないで続けて読んでよ」と繰り返し言った。そこでジャンリーは自分の朗読を録音して、テープを聞かせるようにした。このようなジャンリーの子育て法は自分自身が受けた家庭教育とは全く異なるものであった。彼女の父親は彼女が小説を読んでいると厳しく叱ったものである。高校時代アメリカに留学することもできなくなかったが、両親は全く相手にしようとしなかった。その後、ジャンリーは英語の勉強のためアメリカへ行く2度目のチャンスがあったが、その時彼女はすでに母親になっており、夫はプロクター&ギャンブルの中国のセールスマネージャーとして出張することが多かった。結局、彼女は外国留学の夢をあきらめざるを得なかった。彼女の言葉で表現すると「つまらない人間」になってしまった。学ぼうという意欲もなくなってしまったのである。今でも彼女は外国留学の機会を逃したことを後悔している。

最近、夫はジャンリーに対して、今からでも遅すぎるということはないからムルが留学する時に一緒に留学すればいいじゃないかと言う。ジャンリーはそのことには否定的で「私はもう50才ですよ。この年になってまた大学生になって勉強しろと言うの?」と言う。彼女は自分のことよりもムルの外国留学実現のために全力を尽くそうと思っている。彼女は「ムルの夢の実現のために尽くすことが最も重要なのです」と言う。

ジャンリーはムルのSATの勉強を手伝おうとしてもほとんど役に立たないようだ。ジャンリーは英語の教師をしているがムルの英語力は今やジャンリーのそれを超えているのだ。今年の春節祭の休暇にムルは2週間でアメリカの21大学のキャンパスをめぐるツアーに参加した。このツアーは「エリート中国人」という名のコンサルティング会社の協力で行った。この会社はアメリカ人夫妻が経営しており、アメリカのエリート大学を目指す中国人学生に対するアドバイスを専門にしている。ジャンリーはこのコンサルティング会社が提供する親のための情報交換会に参加したり、すでに子供を外国に送り出している友人や同僚から助言を受けたりしている。具体的な助言として「英語力の向上のためにできるだけ多くの英語の本を読ませなさい」や「とにかくSATが肝心ですよ」などがある。

ジャンリーは英語ができるので他の親たちより有利な状況にある。なぜなら、アメリカの大学で中国語のウェブサイトを開設しているところはまだ少ない。しかも中国人にとって重要な情報をうまく提供できていないのが現状である。中国の母親たちはギリシャ文字で命名された社交クラブやアメリカンフットボールチームに興味を示さない。彼女たちが知りたいのは、卒業生が就職できているかどうかや子供を空港に迎えに来てくれるのかどうかといった情報なのである。

中国のメディアはこのような情報を提供し始めている。子供をアメリカに留学させたい



親たちはオンラインネットワークのチャットルームで常に情報を共有している。ただし、それらの情報が必ずしも正しいとは限らないが。その結果、今の中国人の親たちは以前に比べると外国留学についてよく知っていると言える。彼らはUS ニュース&ワールドレポートが発表するアメリカの大学ランキングやさまざまな大学案内本をよく知っている。しかし、ネット上では怪しい情報に注意しなければならない。例えば、ある会社がお金を出せばエリート大学への入学を確約するという情報がある。ハーバード大学に入学するのに500万元(80万ドル以上)、ボストン大学ならかなり安く19万4千ドルといったものである。

中国の一人っ子政策のためほとんどの中国人にとってアメリカの大学への出願は初めての経験である。相談する兄弟姉妹もない。親にとっても子供にとっても最初で最後の経験である。親の心配と同様、子供たちも大きなストレスを感じている。ムルもそうだった。彼女は机に次のような自分へのメッセージを書き留めた。「前向きに考えるんだ。後戻りはできないので前を向いて一生懸命やるだけだ。努力の後に勝利が待っている。」

6月のSAT受験の1か月前、ムルは重大な決断をした。彼女は学校を1か月休むことにしたのだ。すべてのエネルギーをSATの準備に費やすためである。その間、学校へ通う代わりにSAT準備クラス、家庭教師の授業、実践演習などを行う。ジャンリーは反省させられた。彼女は「私はムルにプレッシャーをかけすぎました。そのことを後悔しています。私はただ娘の幸せだけを願っているのです」と言う。

多くの中国の親たちのようにジャンリーは娘のそばでできるだけのことをしようとしている。娘を映画でしか見たことのない国へ行かせようと準備している。約50万人の中国の親たちは子供たちの未来を、中国の未来をアメリカに賭けているのである。

(2015年7月10日号)

(Copyright 2015. *The Chronicle of Higher Education*. Translated and reprinted with permission.)

### 訳者あとがき

本稿はアメリカで発行されている高等教育に関する週刊専門新聞『高等教育クロニクル』に掲載された記事の翻訳である。筆者はカーリン・フィッシャー氏である。

テーマはアメリカ留学に賭ける中国の親子の強い思いである。アメリカへの外国人留学

生の数は増加している。中でも中国からの留学生数は世界一で年々増加の一途をたどっている。本稿では3人の中国人高校生とその両親のアメリカンドリームに賭ける思いを通して、彼らのアメリカ留学に対する奮闘ぶりを紹介している。今や多くの中国の若者が勇気と期待を持ってアメリカを始めとする世界各国に渡り、貴重な体験を積んでいる。彼らは将来の中国のために貢献する重要な存在と考えられている。一方、日本人のアメリカへの留学生数は21世紀に入りずっと漸減傾向にある。日本人の若者が内向きであると言われて久しいが、将来の日本の行く末を考えた時、不安を感じるのは訳者のみではないと思う。今や日本人にとって外国留学は手の届かない夢ではなく、強い意志があれば比較的容易にできることである。今後、より多くの日本人が外国へ留学し、見聞を広め、自分自身の成長のため、ひいては日本の成長のために尽くしてくれることを期待したい。